

まちのたから (27) 文化財室通信

シリーズ「日本遺産」第2話

前回に引き続き、日本遺産「地蔵信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市」の第1章、大山と地蔵菩薩との関わりについて紹介します。

地蔵菩薩とは

仏教の世界（大乘仏教）には、如来・菩薩・明王・天部など、いろいろな仏がおられます。如来は「悟りを開いた者」を意味し、菩薩は「これから悟りを得る存在」と表されます。菩薩は、悟りを開いて如来になる道がありながらも現世に留まり、人々を救済する存在とされています。

地蔵菩薩は、釈迦如来が入滅してから、弥勒菩薩が如来として現れるまでの56億7千万年の間、衆生を救済する仏として信仰されています。そのご利益には、五穀豊穡や家内安全、長寿、除災、道中無事などがあり、子どもを守護する仏としても知られています。一般的には「お地藏さん」と言った方がなじみ深いかもしれませんが、その功德は現世だけではなく、地獄などの六道に

及ぶとされ、江戸時代には異界との境とされる往來の辻や墓地の入口などに、六道の衆生を救う「六地藏」が祀られるようになりました。お地藏さんは、いつもそばで見守ってくれる身近な存在として信仰されてきました。



▲大山 石の大鳥居前の六地藏

地蔵菩薩・大山の神に!!

平安時代頃、仏教の仏と日本古来の神が、同体的のものであると考える動き（神仏習合）が興りました。

仏（本地）が人々を救うために形を変えて現れた姿が神（垂迹）だという思想が本地垂迹説です。この説では、仏の化身として「権現」と呼ばれました。大山では、地蔵菩薩の垂迹として大智明権現（大山権現とも）と呼ばれ、人々に信仰されました。

地蔵菩薩と大山寺

『大山寺縁起』には、次のように書かれています。

出雲国玉造の獵師依道は、美保の浦の海底から現れた金色の狼を追って、大山の洞穴にたどり着きました。その狼を射ようとしたところ、狼は地蔵菩薩に姿を変えます。さらに老尼の登攬尼に姿を変えます。登攬尼は大山で修行して大山を守る山神となった行者で、依道へ向かって「共に地蔵権現を祀り、そのご利益を受けよう」と説きます。これにより依道は仏道に帰依して修行に励み、やがて金蓮上人となって大山寺を開きました。寺伝では、養老2（718）年のことと伝えており、来年が開山から1300年の年になるというわけですね。

大山と地蔵信仰は、このような深い縁の物語でつながっていたのです。（人権・社会教育課 文化財室）

手にとって

開いてみてください

教科書展示会

小・中・高等学校及び特別支援学校で使用される教科書見本の展示会を県内10か所の会場でを行います。

この展示会は、県民のみなさんに広く教科書の内容について公開し、関心や理解を深めていただくために行うものです。

展示会場

鳥取市立中央図書館・八頭町立郡家図書館・智頭町立智頭図書館・倉吉市立図書館・琴浦町図書館・米子市立図書館・境港市民図書館・大山町立図書館・日野町図書館・鳥取県教育センター

展示期間

6月9日（金）
～7月6日（木）

※会場により、開場日、開場時間が異なりますので、各会場に直接ご確認ください。

◆問い合わせ先

鳥取県教育委員会 小中学校課
☎0857-26-7935